

出来事ファイル (No.21-6)

■デジタルスタンプラリーに元町商店街も一役

神戸青年会議所は、新型コロナウイルスの影響で人の集まるイベントが出来ない状況から、神戸の店で食事や買い物ですてきな景品が当たるスタンプラリーを10月末まで開催している。参加店で支払いの時、店のスタッフが掲示する二次元コードを読み込みデジタルスタンプを入手、スタンプ1個で神戸タータンをデザインしたオリジナルの壁紙、3個で参加店のオリジナル景品プレゼントのほか、10個で豪華景品が当たるプレゼントへ応募ができる、など。



□読者プレゼント

開館30周年記念 企画展 「明石ゆかりの名品展」

今年で開館30周年を迎える明石市立文化博物館の収蔵資料は、考古資料や古文書、美術作品や民具まで幅広いものになっています。今回は、明石の地ゆかりの作家や作品の中から、特に絵画と陶器、漆工といった工芸品を中心に、さまざまな時代の多彩な作品を紹介します。

観覧ご希望の方は、ハガキに住所・氏名・年齢を明記の上、編集部まで。先着順で5名様にペア招待券をお送りします。



明石焼 色絵桜楓文手桶形水指 (同館所蔵)

会場:明石市立文化博物館
TEL 078-918-5400
期間:6月9日(水)~7月4日(日)

神戸元町商店街 楽市楽座 6月

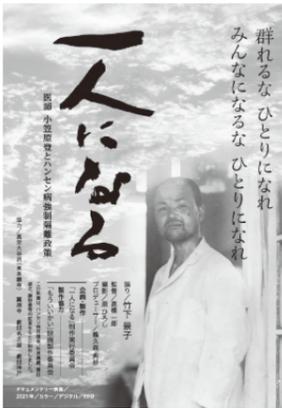
◇こうべまちづくり会館ギャラリー(無料) TEL361-4523

6月10日(木)~6月15日(火)
日彩会水彩画展
6月24日(木)~の竹田真・永田収合同作品展は
令和4年3月3日~に延期になりました。

◇元町映画館(有料) TEL366-2636

5月29日(土)~6月 4日(金)
『ハンバーガー・ヒル』『ある殺人、落葉のころに』
5月29日(土)~6月11日(金)
『フィールズ・グッド・マン』『街の上で』
『クリンヤ』
6月5日(土)~6月11日(金)
『マンディンゴ』『ミッドナイト・ファミリー』
6月12日(土)~6月18日(金)
『ソッキ』『裏ソッキ』
『リトル・サブカル・ウォーズ ~ヴィレヴァン!の逆襲~』
6月12日(土)~6月25日(金)
『一人になる -医師 小笠原登とハンセン病強制隔離政策-』
『アニメーションの神様、その美しき世界 Vol.2&3』
6月26日(土)~7月9日(金)
『結びの島』『いとみち』

【*時短営業の為、予定は変更になる場合がございます。】



■クリーン作戦中止に

5月に予定していた栄町通クリーン作戦及び神戸駅東地区クリーン作戦は、いずれもコロナウイルスまん延防止のため中止されました。

■懇談会対象区域拡大・整備計画案検討へ

みなと元町タウン協議会は、東を鯉川筋・メリケンロード、西をハーバードロードまでのまちづくりを考える組織として平成12年10月12日発足した。阪神淡路大震災で被害を受けたホテルシェラトン再建時、地域として対応するため元町ハーバー懇談会を結成、まちづくりの指針として平成19年11月16日神戸市とハーバード景観形成市民協定を締結した。同協定の運用によりホテル跡は、マンションなどに衣替えしている。

その後、懇談会では会員企業による周辺地域対象のクリーン作戦のほか、新築マンションへの対応、さらには広場を活用したイベント開催などに取り組んできた。

令和3年4月から三宮・ハーバード間の連節バス運行、神戸市による神戸駅南北駅前整備を機に、懇談会では根津コンサルタント指導のもと、まちづくり対象地域の拡大と地域内機能充実のため「ワーキンググループ」発足の準備を進めている。当面の案件は、



- ① JR神戸駅南側広場の再整備案に対する要望
- ② さらなる広場の活用案
- ③ 連節バス元町商店街停留所候補地
- ④ 元町商店街の西側玄関口のあり方などで、懇談会に進捗状況を報告整備を進めていく方針。

編集後記

天井まで水没したバス乗客の体験談を取材に、豊岡市を訪れたことがある。靴の街として知られるその豊岡市に、劇作家の平田オリザさんが居を構え、主宰する劇団の拠点として、江原河畔劇場が開場した。▼劇団に人材を育成するため「芸術文化観光学」という新しい学問領域の拠点に、芸術文化観光専門学校も開校する。こんなところに学生が集まる?という心配をよそに、推薦入試が5倍、一般入試もA日程4.7倍、B日程は27.8倍の倍率だったという。平田オリザさんの実績に魅せられて集まった人たちだろが、平田さんが腰を据えた豊岡のまちで演劇やダンス、観光を学ぶことになる。▼折から20年もの長いあいだ市政を率い、演劇のまちを開花させた中具市長は、4月25日の市長選挙で、演劇のまちなんかいらぬ」と立候補した関貫(カンナキ)候補に敗れ、庁舎をあとにした。▼豊岡劇場が、いよいよ開幕の日を迎える。

みなと元町 TOWN NEWS

No. 346

発行:みなと元町タウン協議会 住所:〒650-0022 神戸市中央区元町通3-13-1協和会館内 発行人:奈良山喬一 編集人:岩田照彦 電話・FAX:078-391-0831

都心・WFの新たなハコに、元町はホンモノへのこだわりで迎え撃つ

合資会社ゼンクリエイト 根津 昌彦

さる2021年3月26日に神戸市が発表した、「新港突堤西地区(第2突堤)再開発事業」において選ばれた開発企画提案は、収容人員1万人超の「大規模多目的アリーナ」建設をメインとした施設計画であった(図1)。選考理由は、「新たな賑わいの創出拠点として、観光・集客需要の増進や交流人口の増加とともに、都心・三宮再整備との相乗効果による地域経済の活性化が期待される」というものであった。



〈図1〉大規模多目的アリーナの南西側の外観イメージ

どのような施設利用が想定されているかという点、施設計画に対する選評には、「アリーナを中心に歩行者専用のプラザやコリドーを設けることで、建物内外に一体感・連続感のある賑わい空間が創出され、施設利用者のみならず来訪者にとって親しみやすい施設構成・配置となっている。メインアリーナは、スポーツを中心としつつも音楽興行等の多目的な使用が可能な施設として整備するとともに、5Gなどの通信技術を活用した新しい観戦・鑑賞体験の提供(中略)などの取り組みが評価された」と綴られている。

振り返ってみれば、2015年9月に「神戸の都心の未来の姿(将来ビジョン)」が公表されてから、たくさんのハコの建設計画が1つまた1つと事業化・完成に向かっている。その中で、先陣を切って完成したのが、今年4月26日に開業した神戸三宮阪急ビルである(写真1)。緊

急事態宣言が4月25日に発出されたため、ホテルであるレムプラスは予定通り開業されたものの、歩行者優先に設えられたサンキタ通りに面する高架下の飲食店や最上階の展望レストランなどは、いきなり休業という試練に直面している。



〈写真1〉三宮交差点南東より神戸三宮阪急ビルを望む



歩行者優先に設えたサンキタ通り

また、冒頭に紹介した新港突堤西地区再開発では、第1突堤の基部にあたる敷地で今秋開業に向けて工事が進行中の新たな文化施設「神戸ポートミュージアム」が、ほぼその外観を現わしている(写真2)。



〈写真2〉隆起する大地と侵食する水により生まれた造形が外観デザインテーマの神戸ポートミュージアム

同施設は、水族館、フードホール、クラシックカーミュージアムが融合する複合文化施設であり、メインとなる劇場型

アクアリウム「アトア(2~4階)」では、多くの生き物と舞台美術やデジタルアートなどの種類の異なるエンターテイメントを掛け合わせた演出による幻想的な空間で訪れた人に癒しの時間を提供することを狙っている。

このほかに、現時点で都心・ウォーターフロントエリア(WF)で計画方針が固まっているハコ(集客施設)は、三宮サンパル&サンシティの建替え(再開発)の「神戸文化ホールの移転(大ホールと中ホール、いずれも多目的)」「図書館」「ホテル」、東遊園地での「こどものための図書館」、磯上公園での「体育館」などがある。一方で、神戸市役所2号館建替え再整備で当初「音楽専用ホール」が整備される予定であったが、コロナ禍で計画見直しを行い建設中止となった(商業施設で代替予定)。

このように神戸の都心は、フラワーロードを南北の集客軸に据えて、にぎわい創造拠点施設の集積が今後5年で大きく進むものと思われる。今後、目新しさや未知の体験を求めて新たなハコに呼び込まれ多くのヒトたちを、元町エリアはどう引き寄せることができるか。

物理的には、新たなスポットの各所から元町へのアクセスが容易にイメージできる、サインや移動手段の充実が一つ挙げられるが、やはり立ち寄る理由、向かう理由がそれにもまして重要であるといえる。いまこの元町エリアにある集客コンテンツを考えた時、強みは何か。「物語」「日々の生活」「人情」に裏打ちされたホンモノとの出会いこそが、元町が自信をもって提供できるモノではないだろうか。長い時間をかけて築き上げられた人の営みがある場所だからこそその複雑な味わいを届けることができれば、また必ずヒトは元町を訪れるに違いない。元町に残るホンモノへのこだわりを「見える化」することに、これから知恵と時間を使いたいと思う。

海という名の本屋が消えた（91）

平野義昌

諏訪山界限(9)

神戸諏訪山で生まれ育った作家がいた。久坂葉子、本名・川崎澄子、1931(昭和6)年3月27日生まれ。19歳の時、芥川賞候補に選ばれた。21歳、みづから命を絶った。占星術では葉子の誕生日は「火星日」。小説で主人公が自らの運命を語る。彼女は恋に悩み、死を選ぶ。〈南原杉子。うまれは火星日である。地球に最も近い軍神マルスの影響を受け、最も強烈に、そのエネルギーを放射。戦闘的性質を有し、目的に対して積極的なれど、多難な運命である。その上、人生の終焉に於いて、複雑な交叉点に、信号を無視して立脚し、自ら禍をまねく。〉^{註1}

葉子の父・川崎芳熊(1896～1971年)は川崎造船所重役、創業者・正蔵(1837～1912年)の孫である。母・久子は加賀藩・前田家と岸和田藩・岡部家の血を引く華族の家柄。川崎本家も男爵である。葉子誕生の頃、名家の財政は傾いていた。本稿「松方幸次郎」の章で述べた。27(昭和2)年、関東大震災後の「震災手形」政策から金融恐慌が発生。銀行に取りつけ騒ぎが広がり、銀行休業が相次いだ。神戸では商社・鈴木商店が破綻。川崎造船所も経営危機に陥り、松方社長は辞職。松方・川崎両家は銀行に資産を差し出した。31年8月の川崎負債額は1億4千万円超(時の国家予算17億円)だった^(註2)。造船船、飛行機、車両など重工業と銀行を傘下に持つ財閥である。浮沈は社会に大きな影響を及ぼす。

〈……実に、一万余人の従業員の失職とその生活危機を招き、関連企業の連鎖倒産も生じかねない。神戸だけでなく、関西、日本を揺るがす経済・社会問題となっていた。〉^{註2}「川崎」再建を担ったのは平生汎三郎(ひらお・はちさぶろう、1866～1945年)(補註1)。教育者から損害保険会社に転身、不振の会社を立て直し、発展させた。当時は引退して甲南学園理事長だが、経営手腕、人格共に関西財界のリーダー的存在だった。「川崎」再建は公益のための奉仕事業、という信念である。軍事産業ゆえ、お国のためという面もある。川崎家に敬意を表し、経営に携わるよう進言するが、当事者たちは消極的だった。

平生は債権者との交渉・和議、組織改革の他、人員整理も行う。同時に職工学校、共済組合、病院(川崎病院)を設立し、従業員・家族の福利厚生対策も行った。無報酬で献身。2年で再建を果たした後、会長に就任した。芳熊は責任のない役職になった。〈……彼女が生まれた時には名門川崎家は風前の灯火にあった。幼少期に爵位を有する川崎家の没落に遭遇して、斜陽の境遇に育つ経験を味わい続けねばならぬ不幸を背負っていた。それこそ栄光とその挫折が影となって付きまとう川崎家の日常を過ごさねばならぬ運命にあった。それらが生まれた年に始まっていたのである。〉^{註2}

とはいえ、川崎家は大金持ちである。中山手通6丁目の大邸宅(現在の相楽園西側にあたる)に住み、家族6人の家庭に女中3人と乳母がいた。〈明治の御代に、一躍立身出世をした薩摩商人の血と、小さな領地を治めていた貧乏貴族の血とが、私の体をこしらえあげた。／私の父は、その頃、曾祖父の創業した、工業会社の重役をしており、私の母は、上品なきれいな好きの江戸っ子であったから、私の極裸(おむつ)は常に清潔でさらさらしていた

らしい。〉^{註3}葉子は幼稚園の頃から日本舞踊とピアノを習い、小学生になると両親と共に俳句と南画を嗜む。読書は西行法師や講談物。優等生だが、盗癖やカンニングなど問題行動もあった。浄土真宗を信仰する担任に影響を受け、尼僧に憧れ、さらに西行を読んだ。幼いながら独自の精神世界を築いていた。教会の告別式の光景から死を意識しはじめる。42(昭和18)年、諏訪山国民学校(現在神戸市立こうべ小学校)卒業、神戸山手高等女学校(現在神戸山手女子中学校高等学校)入学。学校生活は教練や防空壕掘り、畑作りなど労働の日々だった。勤労奉仕中に空襲に遭うが、防空壕に避難せず、近くの神社で本を読んでいた。

45(昭和20)年6月5日の空襲で自宅焼失。葉子は、家に未練はない、思い出は罪の重なり、不快な臭いに満ちた事件ばかり、と書く。〈物干台へ出て、父と二人で市内の焼けてゆくものをみていた。それは全く壮観であった。〉^{註3}翌日の焼け跡。〈……金庫が一つ横だおれになっていた。ピアノの鉄の棒が、ぐにやりまがって細い鉄線がぶつぶつ切れになっていたし、電蓄も、電蓄だと解らぬ位に残骸のみにくさを呈していた。本の頁が、風がふく毎に、ばらばらくずれて行った。私は何の感傷もなくそれ等の物体の不完全燃焼を眺めた。〉^{註3}

8月6日、移り住んだ伯父宅も空襲を受けた。葉子は死を覚悟し、念仏を唱えた。一家は死を免れた。戦争は終わった。世の中も学校も民主主義・自由主義に変貌した。葉子に喜びはない。戦争を言い訳に仏教や死について突き詰めて考えてこなかった、と反省する。芳熊は戦争責任追及を恐れて、いらいらしていた。〈……確かに沈鬱な家庭であった。大豆をゴリゴリひいたり、道端の草をゆでたり、そんなこと以外にお互いに何か考えているような表情で笑いもなく毎日を送った。〉^{註3}

芳熊は占領軍により公職追放処分、無職になった。補註2〈……私の家は財産税などで、だんだん土地を手ばなしたり家財道具を売りはなしはじめたりしていた。(中略)私達子供は家産がどの位残っていてもどんな風な経済状態にあるのかは知らなかった。唯、焼けた私の生家の土地も、本家の邸跡も、六甲の別荘も人手に渡っているらしかった。人の氣勢が金銭の問題で荒れて来るということは大へん敷かわしいと思った。〉^{註3}

家庭内の不和、教師との軋轢から葉子は学校をさぼる。映画を見、寺社を巡る。酒と煙草を覚えた。心身に苦痛を感じ、数珠も仏教書も処分した。この頃自殺を試みた。家族は大きなショックを受けた。山手高女を中退させ、相愛女子専門学校音楽科(現在相愛大学)に入学させるが、葉子はすぐ辞めてしまう。両親は葉子の自由行動を許していたが、就職希望には「御家の恥辱」と大反対した。

48(昭和23)年1月、葉子は内緒で元町の羅紗問屋に就職。掃除、お茶くみ、その他雑用。そろばんもタイプライターもできない、商品知識もないが、挨拶や電話対応の飲み込みは早く、客の評判もよかった。人間関係を把握して気配りができ、皆に可愛がられた。

同年3月、山手高女は川崎家の寄付や理事の立場を考慮し、葉子を卒業扱いにした。

葉子の生活は会社が大部分で、家族と疎遠に

る。同年10月のこと。〈突然、私は自分がいろいろなことに抵抗して生きることを苦痛に思った。(中略)衝動的に、私は死への誘惑を感じた。〉^{註3}友人の母親(相談相手、別の作品に「熊野の小母様」とある)に別れの挨拶をし、薬局で「劇」と書かれた薬を買って帰る。一人食事をすませた後、便箋を取り出した。〈……最後の芝居がしたかった。私は架空の愛人への手紙をきてはいたが、私の死因が失恋であるように自分を上たげた。(中略)私は、さいころをふった。たった一つのさいころを、奇数が出たら、私は即座に薬をのもうと自分に云いきかせながらふってみた。一が出た。私はコップに水をくんで来て、薬全部をのんだ。〉^{註3}

友人の母親からの電話によって事件が発覚した。葉子は、頭痛・動悸激しく、嘔吐し、髪の毛をひきちぎり、もがき苦しんでいた。命は取り留めた。〈……こういう運命的な出来事がひどく滑稽に思われた。自殺することは、今までのあらゆる抵抗の最もちぢめられたしかも最も大きなものである筈なのに、抵抗する力を失ってよくも生への抵抗を試みたものだと思苦笑した〉^{註3}

葉子は会社に復帰するが、胸部疾患が判明し、退職を余儀なくされた。家で静かに孤独な生活を送るが、苦しみではなかった。

川崎家は取入なし。焼け残った財産で日々の食事は保持できてはいたが、それも次第に減少する。家庭はさらに荒んでくる。

葉子は、日常にも自分にも未来はない、と感じる。容易に死ぬことができると考えていたが、死は近づいて、遠ざかった。失望がある一方、安堵もあった。〈結末のないお芝居の幕が降りようとした。その幕が降りきらないうちに観客はあくびをして立ち上がった。幕は中途半端なところで中ぶらりんに垂れていた。〉^{註3}

註1 久坂葉子「華々き瞬間」(『久坂葉子作品集 女』六興出版、1978年)所収

註2 高坂薫「久坂葉子の周縁——川崎家と島尾敏雄——」『久坂葉子全集第三巻』しおり、鼎書房、2003年

註3 久坂葉子「灰色の記憶」(上記『作品集』)写真「久坂葉子研究」(同研究会編・発行)第一号から四号、神戸市立中央図書館蔵

補註1 平生は兵庫県立商業学校(現在兵庫県立商業高等学校)校長を経て保険会社に入社。1910(明治43)年、財界有志と甲南学園設立。25(大正14)年会社退職、教育・社会事業に専念。34(昭和9)年甲南病院開院。ブラジル視察・移住事業に貢献。貴族院議員、文部大臣、大日本報国会会長を勤めた。Web「甲南学園創立者平生汎三郎の生涯」より。

補註2 56(昭和31)年、芳熊追放解除。神戸オリエンタルホテル社長、川崎重工工業専務就任。

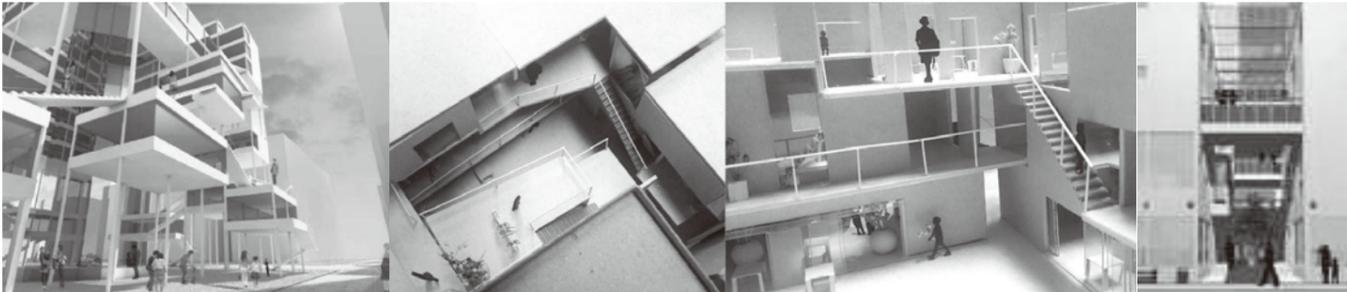


乙仲通 界限の魅力と可能性 乙仲さんぽ活動報告 ⑪

乙仲らしい住空間

2015年から2017年の3年の間、私たち日本建築家協会(JIA)近畿支部兵庫地域会のメンバー(建築家)と、有志の学生や地元のみなさんで行ってきたワークショップ。「地域と学生と建築家」のコラボレーションにより、主体的で、客観的で、未来的な意見交換がなされています。その中では、「乙仲らしさ」について、よく議論されていました。ここにしか無いもの、ここで期待すること、ここにある事の意味などです。ショップやオフィスや住居や倉庫など、さまざまな用途が混在しているため、この乙仲通りとの関わり方によって、見えるものが変わります。どこにスポットをあてて見るか、例えば、観光客や買い物客が目的で訪れる人の見え方、仕事でこの界限にくる人の見え方、住む人からの見え方。そんな関わりの中から、いろんな顔を持つのが乙仲通り界限です。どの立場で何を切り取り、その1つの切り口だけではなく、いくつかの要素が入り込むことで、より乙仲らしい広がりや豊さを持ち得る可能性を感じました。

特に2年目(2016年)の乙仲さんぽで、より具体的な提案を募集したとき、主に3つの提案がありました。1つ目は、ソフト的な提案。2つ目に、隙間を利用した公共空間との関わり。3つ



佳作
京都工芸繊維大学
歴史的町並みと、現代都市の「狭間」に。

最優秀賞
京都工芸繊維大学
路地でつながる商店集合住宅 ～乙仲での新しい暮らし方の提案～

神戸松蔭女子学院大学
THE SHARE
-乙仲通のシェアマンションの設計

私にとっての乙仲

私にとっての乙仲通り。私が元町3丁目に事務所を借りたのが、29歳の時。そこから6年ほど、元町界限と自宅との行き来が日常だった。兵庫区にある実家と自転車で横断する神戸。片道15分ほどの間には、町の風景が住宅地から繁華街、神社や商店街を抜けるドラマがあった。お昼のランチは、お店に迷いながら、あちこちの店を食べ歩いた。乙仲にもその間よく、散歩に出かけたり、食事をしたり、煮詰まった時に気をぬくためにぶらぶらとする場所だった。その後、事務所を移転して、前ほど行かなくなっていたが、久しぶりに行くと、新しい店も増

目が、駐車場になっている場所に対して、住居と仕事を組み合わせた建築でした。この3つ目の建築の提案が乙仲らしい住空間、ひいては、乙仲らしい建築空間を問うものだったと思います。乙仲は、神戸の中心である三ノ宮、元町界限からマンションが連立する神戸駅方面にかけて、長く東西に位置することで、西に行くほどグラデーショナルに住居の割合が多くなってきます。住むことで生まれる人間らしいリアリティのある空間とショップのような非日常空間、オフィスのような形式的な空間、それらが集合する違和感。それが、乙仲らしい面白さだとすれば、それに対する真摯な答えこそ、乙仲らしい建築の提案です。具体的には、3つありました。1つ目は、乙仲の東の端に位置する場所で、現在、大きな駐車場となっている敷地に対する提案でした。提案は、商業施設とホテルやオフィスの複合施設でした。よくある内容ですが、そこには、乙仲のような小さなショップや建物と大丸などの大きな施設とをつなぐための工夫がありました。建物としては、大きな複合ビルですが、内部には路地を持ち込むことで人間らしいスケールを再現していました。また、ホテルは暮らし方の提案にもなっていました。宿泊としてのホテルという意味だけではなく、長い時間滞在できる住ま

公益社団法人 日本建築家協会 近畿支部 兵庫地域会
乙仲通界限デザインワークショップ実行委員会

いに近づく提案になっていました。2つ目は、乙仲通りの2、3丁目にあった駐車場に提案されたものでした。ここでは、SOHOなどを目的とした職住一体ができる空間が提案されました。通りを挟んだ2つの敷地に3階建てで小さなボリューム感のある建物がいくつか配置されました。建物の間にある路地や庭は、4つの家族以外に、訪れた人や通り抜ける人が共用できる設えになっており、とても面白い計画となっていたため、この年の最優秀賞に選ばれていました。このような形式でこの乙仲界限の街がリノベーションされると、きっとここにしかない街、価値、味わいが継承されるだろうと、個人的には思っています。3つ目はシェアハウスの提案でした。クリエイターやアーティストたちが「住み、制作し、共有し、発信する場」が2丁目界限の駐車場だった場所に、4階建ての建物に、大きな中庭空間を囲いながら、計画されていました。1階を街に開き、2階から上は、クリエイターたちのシェアするスペースです。乙仲のようにさまざまな人や形を受け入れる場所らしい、ゆるやかな受け皿になる場所の提案でした。このように、乙仲には、乙仲らしい住まい方ができることがよくわかりました。

えて、またワクワクしながら、前よりゆっくりと時間をかけて、乙仲を散策することもある。最近では、大きなマンションやホテルの建設が進み、すっかり見違える雰囲気になってきている。小さな商店、小さなボリュームだった佇まいが、少しずつ大きな資本、大きなボリュームに変わりつつある。さみしい気持ちもあるが、考え直すとともと、そういう場所だったのだろうとも思う。近代以降、神戸が躍起になっていた時代のドタバタしたものが薄れ、大きな流れの中に沈み、新しい街に変わりゆく課程。空が狭くなり、道路は広くなり、モラルだったことはルール化される。でもきっと、これからの多様性の時代に、いまの凸凹がすぐに淘汰されることもな

く、それがまた、面白みになるといいと思う。あらゆる時代のあらゆる思惑が、この通りを通ると感じられる。そんな凸凹した乙仲が乙仲らしいと思う。与えられたものにつかるのではなくて、自分たちで解体して自分たちで創る居心地みないなものが、乙仲にはあって、生きているな、動いているな、と行く度に感じる人間味みたいなものが、街と相まって、これからも乙仲を変化させ続けて欲しいと思う。



阿曾 美実 (あそ ふみ)

阿曾美実建築設計事務所 代表
／一級建築士／武庫川女子大学 非常勤講師／摂南大学 非常勤講師